

令和8年度 西尾市中学生の主張大会

— DREAM AND HOPE —



〈表紙絵〉 鶴城中学校3年
今枝 みう

日 時 令和8年8月18日(火)

(開場) 12時50分 (開会) 13時20分

会 場 にししん文化会館 茶々とホール

表紙絵に込めた願い

この表紙絵には、私たちの伝えたい想いが溢れ出ているイメージと、夢と希望に満ち溢れた未来へ明るく羽ばたきたいという想いを込めました。

どんな人にも、希望の光が差し込み、喜びを感じられる世界であってほしいです。

令和 8 年度

西尾市中学生の主張大会

DREAM AND HOPE

(令和 8 年度全国大会スローガン)

〈趣 旨〉

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力を身に付けることが大切です。本大会は、こうした能力の育成と、青少年の健全育成に対する市民の理解を深める契機となることを願い実施するものです。

〈大会概要〉

- ・昭和 5 4 年の「国際児童年」を記念して全国で『少年の主張大会』が開催され、本年度で 4 8 回目を迎える。
- ・西尾市では、『青少年健全育成市民大会』の中で『少年の主張』を発表し、青少年の健全育成に関わる諸団体が参加した。
- ・平成 1 5 年度より『社会を明るくする運動』と合同で開催をしてきたが、令和 6 年度から『中学生の主張大会』として単独で開催している。
- ・市内の 1 0 中学校、1, 5 3 8 名の応募者の中から選ばれた 1 0 名が、自らの生き方、家族、社会問題などの多様なテーマについて主張を発表する。

〈大会次第〉

- ① 開 会 の 辞
- ② 主催者あいさつ
- ③ 来賓祝辞
- ④ 中学生の主張（第 1 部）
 〈 休 憩 〉
- ⑤ 中学生の主張（第 2 部）
- ⑥ 花 束 贈 呈
- ⑦ 閉 会 の 辞



令和 8 年度「中学生の主張大会」の 動画配信について(案内)

本大会の動画配信を 9 月 1 日から開始します。
会場にお越しになれなかった方、会場での感動をもう一度味わいたい方は、下記の西尾市生涯学習課（公式）YouTube チャンネルから、中学生の熱意あふれるスピーチを是非ご視聴ください。

○西尾市生涯学習課（公式）
YouTube チャンネル

○問い合わせ先
西尾市教育委員会事務局
生涯学習課
電話 55-3515



— 中学生の主張 —

(第1部)

忘れてはいけないこと	吉良中学校	第3学年 なかしま ももこ 中嶋 桃子	3
「自分らしさ」とは	西尾中学校	第3学年 こばやし さき 小林 紗己	4
幸運の貯金	平坂中学校	第3学年 なかむら はな 中村 芭菜	5
命をつなぐ十六歳	福地中学校	第3学年 はんじ かほ 判治 佳穂	6
大切な場所	一色中学校	第3学年 わたなべ えみか 渡邊 笑佳	7

(第2部)

希望の光	幡豆中学校	第3学年 せいの ここね 清野 心寧	8
世界の架け橋へ	鶴城中学校	第3学年 なかやす こはる 中易 小春	9
デジタルか紙か	寺津中学校	第3学年 さかい きおり 酒井 希織	10
受け継ぎたい「輪っば」	東部中学校	第3学年 まきの はると 牧野 陽斗	11
先輩らしく、自分らしく	佐久島しおさい学校	後期課程 第3学年 まつした なな お 松下 七緒	12



私は最近、母とよく喧嘩をします。いわゆる反抗期というやつです。母とはなぜか意見がぶつかってしまい、たびたび言い合いを重ねてしまうのです。しかし、普段は一緒にゲームをしたり、おいしい食べ物を食べに行ったり、たわいもない話でふざけ合ったりする楽しくて優しい母です。母も私も、喧嘩がしたいわけではないのですが、ささいなことでぶつかり、両者とも譲れない言い合いになると、空気は一変。ちくちくとしたとげのある空気が私たちの間に流れます。私は母の言っていることに納得ができず、いらいらしてものに当たったり、母の言ったことに対して強く言い返したりしてしまいます。自分の言っていることは合っているはずなのに、母の言っていることの方が合っているような気がして、どうしても「母を言い負かしたい」という気持ちが芽生えてしまうのです。しかし、私が何をどれだけ言っても、母はあつけられかんとした様子で間髪入れずに言葉を返してきます。結局、私が母の正論に追い詰められ、何も言えない状態になって終わるのが、いつもの流れです。

しかし、その日だけは違いました。

私はずっと楽しみにしていたテレビ番組を見ていました。番組のおもしろさがピークになり、興味をそそる話題になったその時、母がテレビの電源を突然切ると同時に「夜遅いんだから寝なさい」と言ってきました。さらには「最近朝起きれてないんだから」と余計な一言。それをきっかけに私はいらいらして、また母と言い合いになりました。私が楽しみにしていたことに対して、それをやめさせるようなことを言ってきたため、とても腹が立っていました。その日はとくに感情がたかぶってしまい、母に「こんな大人にはなりたくない」と言い放ちました。また母はいつものようにあ

つけられかんと正論を繰り返してくる……と身構えていると、何も言わず寂しそうな顔をした母が私の目を見て

「悲しいよ」

と一言だけ言いました。

その瞬間、私は衝撃を受け、後悔の思いで心がいっぱいになりました。母の弱音とあんな顔は、生まれて初めて見たからです。私ははっと我に返り、何て酷いこと言ってしまったのだろうという気持ちになりました。何度も喧嘩を繰り返すうちに、自分の言い分をわかってほしいという気持ちよりも、ただ母に勝ちたいという気持ちのほうが強くなり、言葉を選ぶことができなくなってしまっていた自分に気づきました。

いつもなんでも言い返してくる母だから、何を言っても受け流してくれると勝手に想像し、母の気持ちを考えようとはまったく思っていませんでした。

小学校の時から「相手の気持ちを考えなさい」と何度も言われてきました。SNSで人を傷つけるコメントを見て酷いなと思っていました。自分が相手の気持ちを考えずに言葉を発するなんてありえないと思っていました。自分自身できちんとコントロールできている。そう思っていました。しかし、私はそうはならないだろうと思っていた人たちと、同じことをしてしまったのだと分かり、罪悪感が押し寄せてきました。

今でも私は反抗期です。相変わらず母と喧嘩をします。しかし、今はあの頃とは少し違い、自分の気持ちをどんな言葉で伝えたらよいかを考えることを意識しています。そしてどんな状況でも「相手の気持ちを考える」という、あたりまえのことを忘れないようにしたいです。

私の言葉を、誰かの悲しみではなく、誰かの笑顔につなげられるようにしたいです。

「自分らしさ」とは



西尾中学校

3年

小林 紗己

「これは本当の自分なのだろうか」

私は、人と同じであることが安心につながる一方で、それだけでよいのだろうかという疑問をもつようになり、「自分らしさ」について考えるようになった。

その理由の一つに、私の体格がある。私は周りの女の子に比べて体格がよく、少し「太い」自分の腕や脚が恥ずかしくて、いつも隠そうとしていた。「大きいね」と言われると、悪気のない言葉だとわかっていても、自分だけが周りと違うように感じてしまい、自分の見た目に自信がもてなくなっていた。

小学4年生のときは、特に周囲の目を気にするようになっていた。クラス内で自分が浮いてしまわないように、なるべく目立たないように行動し、本当は違うと思ったことでも友達に合わせて意見を変えていた。その方が安心できると感じていたからだ。しかし、そのようなことをするたびに、「これは本当の自分なのだろうか」という違和感が、私の心の中に広がっていた。

そんな私が大きく変わるきっかけとなったのは、中学校のソフトボール部での経験だ。入部した当初、ソフトボールは私にとって、ただの部活動に過ぎなかった。しかし、本格的に練習が始まっていくと、自分の体格を生かせる場面の多さに気づいた。キャッチャーだった私は、体格を生かしてピッチャーが投げた球をカバーでき、打撃では力を生かすことができた。大会で打席に立った私が迷いながらも振り抜いたバットにボールが当たると、ボールは力強く飛び、チームの得点につながった。ホームに戻ってくると、チームの仲間が喜んで出迎えてくれた。そのとき、私は、自分の体格が実は強みになるのだと思えた。

泥だらけになりながら、一つのボールを追いかけて、チームの仲間と声を掛け合う。そこには、「女の子らしく」振る舞う必要なんてどこにもない。ただ一人の選手として、まっすぐに努力する私がいればよかった。

この経験から私は、「自分らしさ」とは無理に誰かに合わせるのではなく、自分の特徴を知り、それをどう生かすかを考えることによって

見つかるものだと思うようになった。しかし、それは簡単なことではない。まだ、周りと違うと気になったり比べたりすることもあるからだ。でも、以前のように自分を否定することは少なくなった。ソフトボールを通して、自分の特徴を受け入れることの大切さを学ぶことができた。

小学4年生の頃の私は暗く、放課になると図書館で本を借りて時間を潰すように過ごしていた。おとなしい性格で、「できない」「やれない」が口癖だった気がする。けれど、ソフトボールを通して自分の特徴を受け入れたことで、私は少しずつ変わることができた。以前より明るくなり、本音で話せる仲間が増えた。授業で発言できるようになったり、何事にも挑戦できるようになったりもした。今日ここに立つことができているのも、周りとの意見を合わせるだけだった自分自身を見つめ直し、変わることができたからだと思う。まだまだ忍耐力が足りなかったり、すぐに弱気になったりしてしまう自分もいるが、それも自分の一部だと受け止められている。

私はこれまでの経験を通して、自分のよいところだけでなく、これまで嫌だと思っていた部分も含めて、「自分らしさ」なのだと気づいた。人と違うことは不安や悩みの原因になることもあるが、見方を変えれば、それは自分だけの個性であり、強みになる可能性をもっている。私にとっては、それが体格であり、気づかせてくれたのは中学校で出会ったソフトボールだった。

これから先も、私はきっと人との違いを感じて悩むことがあるだろう。しかし、そのたびに思い出したい。あのとき、ソフトボール部の仲間がくれた喜びと自分の体格に自信がもてるようになったときの気持ちを。そして、自分の全てを受け入れながら、自分らしく前に進んでいきたい。

「自分らしさ」とは、誰かと比べて決まるものではない。自分自身とどう向き合うかによって形作られていくものだ。私はこれからも、「自分らしさ」を大切にしながら自分にしかできない形で輝いていきたい。



「また負けた」

私は、よく祖父母の家に行くことがある。それは「回り将棋」というゲームだ。将棋の盤で金の駒を4つ振り、出た目の数だけ進める。外側を回っていき角に止まったら上がることができる。歩から始まり香車、桂馬と上がっていき、王将に最初になった人が勝ちというゲームだ。このゲームは本将棋とは違い、実力ではなく運で勝つことができるものだ。今まで、私と祖母と祖父の三人でたくさんの勝負をしてきた。毎回ホワイトボードに記録していく。おかしい。運のゲームなら大体同じくらいの勝率になるはずなのに、私と祖父、二人の勝った数をたしても、祖母の勝った数には負ける。祖母が大体勝ってしまうのだ。喜ぶ祖母を見ながら、何でだろうとずっと考えていた。

そこで、私は考えたことがある。どうということかという、祖母は日頃から徳を積んでいるのではないかということだ。祖母はとても優しい。人間にはもちろん、虫や花など、全てに優しいのだ。死にそうになっている蝶々の幼虫を、祖母が図鑑を使って調べて助けていたのを私は見たことがある。その幼虫は、さなぎになり立派な成虫になることができた。何匹も助けているから、うちの庭にはたくさんの綺麗な蝶々が、祖母のおかげで元気に飛び回っている。そういうことの積み重ねが、祖母も気づかぬうちに徳を積んでいることになり、良いことが起こることに繋がっているのだろう。

そのことに気づいた私は早速、徳を積もうと考えた。私は今まで教室や通る道にごみが落ちていても自分のものでなければスルーしていたし、挨拶もしてくれる人にしか返したことがなかった。だけど、ごみはできるだけ拾ってごみ箱に捨てたり、自分から周りの人に「おはようございます」と挨拶したり、他にも困っている子がいたら声をかけたり話を聞いたり、今まで別にいいやと思ってやってこなかったことをやってみた。行動理由が少しよこしまな理由だったから効果があるのかと半信半疑でいながらも地

道に善いと思われる行動を続けた。

ついに、祖母の家に行く日になった。いつもどおり回り将棋を三人でやることになり、どきどきしながら金を振る。1回戦目祖母の勝ち、2回戦目祖母の勝ち、3回戦目祖母の勝ち。結局、全部祖母が勝ってしまった。祖母と私の差は縮まるどころか広がってしまったのだ。1回くらい私が勝ててもいいじゃん。意味ないじゃん、私と祖母の行動にどんな差があるのだろうと思った。

けれど、私は自分の行動を変えなかった。それは私の習慣になりつつあったからだ。いつの間にか「ありがとう」と言ってもらえることや「えらいね」と褒められることが増えていった。その度に少し誇らしい気持ちになってとても嬉しくなる。さらに、私のちょっとした気遣いが周りの人を少しでも幸せな気持ちにしたり、笑顔にしたりすることができることに気づいた。そして、それは私の自信にも繋がっていった。私は祖母がなぜあんなに優しくいられるのか、ずっと不思議だった。だが、その理由がやっとわかった気がする。祖母は見返りを求めてはいない。打算的な理由で行動しているわけではないのだ。周りの人が自分のちょっとした行動で笑顔だとこちらも良い気持ちだし、自然と笑顔になることができる。だから、祖母はいつもいい笑顔でにこにこしているのだろう。つまり、周りの人を幸せな気持ちにすることは、自分の幸せにも少しずつ繋がっていつているのだ。気づけば徳を積む理由は、いつのまにか回り将棋で勝つことから、周りの人や自分の笑顔のためへと変わっていた。私と祖母の差は近づいてきているのかもしれない。でも、まだまだ祖母のレベルには程遠いだろう。

これからも私は徳をたくさん積んでいく。それはやがて幸運の貯金となり、私や周りの人を笑顔にすると信じている。幸運の笑顔が一人、また一人と増えていけば、社会全体に幸福の輪は少しずつ広がっていくだろう。



私には、16歳になったら協力したいことがあります。それは「献血」です。献血とは、病気の治療や、手術で輸血を必要としている患者さんの命を救うため、健康な人が自らの血液を提供するボランティアです。

一番少ない200ミリリットルの献血は、男女ともに16歳からと、法律で定められています。そのため、現在中学3年生の私にとって、来年からできる社会貢献です。

みなさんは、献血に対して、どのようなイメージをもっているのでしょうか。怖い、痛そうといったイメージをもつ人もいるかもしれません。実は私自身、注射が何よりも苦手です。毎年、予防接種の時期が近づくたびに、ずしりと気持ちが悪くなります。

そんな私が献血に興味をもったきっかけ。それは、ユーチューブで視聴した動画です。献血で使用される注射針の太さは、予防接種に使われる針よりも少しだけ太いのだそうです。やっぱり、私には耐えられないかもしれない。それでも、もう少しだけ動画を見てみることにしました。

すると、献血ルームは思っていたよりもずっと明るく、やわらかな雰囲気だと気づきました。献血後には、低血糖症状による体調不良を防ぐために、飲み物やお菓子をいただき、休憩スペースでゆっくりと過ごすことができます。ちょっとした日用品や記念品がもらえることもあると知りました。自分の健康管理に役立つ、血液検査の結果も教えていただけるようです。

献血に興味をもっていた私を見た母は、知人に、定期的に献血をしている人がいることを教えてくれました。企業によっては、献血車が半年に1回などの頻度で来るようで、協力しやすいのだそうです。人のためになり、自分のためにもなるなんて、なんだか素敵だなと思いました。注射が苦手だった私ですが、もう少し詳しく献血について調べてみることにしました。

「血液は人工的につくることはできない」。

みなさんは、この事実を知っていますか。私たちの体に流れている血液は、生きた細胞でできた複雑な構造の組織です。そのため、人工的につくったり、長く安全に保管したりすることが非常に難しいのです。つまり、常に誰かが誰かのために献血の協力をしなければ、救える命も救えなくなってしまうということです。さまざまな事情で輸血を必要とする患者さんは、一日の平均で約3千人。それを十分にまかなうための献血協力人数は、約1万4千人にのぼります。街中で献血を呼びかける人や、看板を見かけたことのある人もいるのではないのでしょうか。

献血も社会貢献のひとつ。現在14歳の私は、にしおマラソンにボランティアとして参加したことがあります。ゴール直後のランナーの方々にタオルを渡し、「お疲れさまです」と声をかける役割を任されました。フルマラソンを走りきり、疲れているはずなのに、笑顔で「ありがとう」と返してくれる方ばかりだったことが、心に残っています。マラソンに参加した人だけでなく、ボランティアの私にも大きな達成感や、喜びが感じられました。

献血をしたことで、患者さんから直接「ありがとう」と言ってもらえるわけではありません。けれども、同じ空の下で生きている誰かの命のために、私の思いは必ず活かされます。それは、とてもやりがいのあることだと思います。

今の私には、注射針への恐怖心や苦手意識がまだあります。16歳になっても、克服することは難しいかもしれません。しかし、大事なものは、必要としている誰かのために一歩踏み出すことだと思います。

献血も少子高齢化の影響を受けており、この10年で献血協力人数は、約50万人も減少しているのだそうです。いつの日か、私もあなたも、誰かに命をつないでもらうことがあるかもしれません。この思いを胸に、最初の一步を踏み出せる自分でありたいと思います。

大切な場所



一色中学校

3年

渡邊笑佳

「おかえり」

「ただいま」

私にとって「家庭」とは、あたりまえに帰る場所であり、安心して過ごせる場所である。ただ、安心しすぎているからか、時々わがままな自分が出てしまうことがある。

最近、家族とけんかをするが増えてきた。些細なことがきっかけで言い合いとなり、だんだんいら立ちが膨らみ、つい強い口調で言い返してしまう。しかし、いつも後になって、なんであんな言い方をしてしまったのだろうと後悔することになる。

つい先日もそんな出来事があった。学校から帰ってきて、リビングでふと一息ついていると、

「宿題やったの」

と、キッチンから母の声。疲れた私の身体にのしかかったその言葉で、いら立ちがふつふつと沸き起こってきた。

「今やろうと思っていた」

「今って、もう1時間くらいずっとそこにいるじゃん」

「うるさいな」

スマホ片手に2階の部屋へ向かうと、

「スマホを置いていきなさい」

私は振り返りもせず、スマホを持ったまま、部屋のドアをバンッと閉めた。机に向かってしばらくスマホをいじっていたが、そんな自分にも嫌気がさしてきた。さすがに宿題をやらなければと思い、いらいらしたまま宿題を終えた。もうすぐご飯の時間だ。さあ、どうしようか。ふて腐れて2階に上がってきてしまった手前、1階に降りるのが嫌になる。しかし、すぐにご飯を食べて、塾に行かなければならない。

しぶしぶ1階に降りていくと、母はいつも通り、すぐに塾に行けるように、先に私のご飯だけを用意してくれていた。私のことを考えてくれている母の姿を見ると、さっきのわがままな態度がますます嫌になる。

「笑佳、行くよ」

当然のように車で送ってくれた。ただ、車の中の雰囲気がいつもより重たく感じた。

母は私のことを思っていて言ってくれている。本当に私のことが嫌いだったら、何も言わずに放っておくはず。私が汚い言葉で言い返しても、無視しても、言葉をかけ続けてくれるのは、私の日々の生活がよりよくなってほしい、勉強がもっとできるようになってほしいと思ってくれているからだ。それは分かっている。分かっているけれど、意地を張ってしまったり、恥ずかしくなったりして、素直になれない。「ごめん」と一言言えば済むことなのに、それすらなかなか言うことができない。でもきっと、そんなことで葛藤していることすら、見透かされているのだろう。

「行ってきます」

車を降りるとき、「ごめんね」の言葉が喉まで出かけたが、やっぱり言えなかった。母の優しさに触れる度、心の中で反省する。

「家庭」とは、ただの帰る場所ではなく、ありのままの自分と向き合っていく場所ではないだろうか。最近増えてしまったけんかも、結果として私の心の成長につながっている。けんかするほど、私は私の未熟さに気付かされ、反省し、成長しようと思わされる。

でも、まだまだ未熟な私だから、また感情的に怒ってしまうかもしれない。強い口調で言い返してしまうかもしれない。それでも、私は私の「家庭」が大好きで、そんな大切な場所で、もっともっと成長していきたい。

もしかしたら、家族だから言葉にしなくても仲直りできるかもしれないし、言葉にしなくても私の気持ちに気付いてもらえるかもしれない。でも、大事な気持ちだからこそ、きちんと言葉で伝えたい。

「お母さん、今日もありがとう」



私には7歳年の離れた自慢の兄がいます。

兄はいつも自分のことよりも人のことを第一に考える優しい性格の持ち主です。

そして、人一倍の努力家でもあります。

高校受験期。兄は学校から帰ると自分の部屋で勉強を始め、夕食を済ませた後もすぐに部屋に行き再び勉強です。

きっとこういう人がこの先、明るい未来を歩くんだと信じていました。

そして迎えた合格発表。

学校から帰宅した私の目に真っ先に飛び込んできたのは母の暗い顔。家中に漂う重苦しい空気。当時小学校3年生だった幼い私でも結果が良くなかったことが分かりました。

兄は志望校に合格できませんでした。

兄の部屋の扉をそっと開けました。

目を腫らして鼻をすすっている……。

私が初めて見る兄の姿でした。

どんなに疲れていても辛くても涙を見せない兄だったのに。

私には理解ができませんでした。なぜあんなにも毎日、毎日努力し続けてきた兄がこんなに辛い思いをしなくてはいけなのか。私の胸は締めつけられ、激しく痛みました。妹の私ですらこんな怒りにも似た感情になるのです。兄はどれだけ辛かったことでしょう。

兄はショックから長い間立ち直れませんでした。

いつもくだらない冗談を言って家族を笑わせていた兄だったのに。

まぶしいほど明るい兄だったのに。

家族からの「大丈夫？」との問いかけに笑顔をつくらなかった兄は「大丈夫」とだけ答えます。

ぜんぜん大丈夫じゃないのに。

どうにか立ち直ろうと、高校3年間を特進クラスで過ごし、兄なりに懸命に前を向こうとしていました。

それでも毎朝、制服に腕を通す時のどこか浮かない表情。時折出てしまうため息。

そんなある日のこと。その日は雨が降っていて道路が滑りやすくなっていました。

家の近くでの買い物の途中。兄は乗用車が横転する事故を目撃したのです。

乗っていた女性は意識こそありましたが身動きがとれず車の中で助けを待つことしかできない状態でした。

兄はすぐさま行動しました。その場にいた大人の男性と二人で女性の救助活動にあたり見事にその場のヒーローになったのです。

「ありがとう」

女性から感謝の言葉をいただき、兄はその瞬間心に灯がともるような喜びを感じたそうです。到着した救助隊の迅速かつ的確な活動を目の当たりにした兄は「自分も正しい知識や技術をもって、もっと人を救いたい。困っている人の役に立ちたい」と、大きくはつきりとした夢をもちました。

暗かった兄はどこかに行ってしまった。もともとの明るい兄、いいえ、パワーアップした兄が帰ってきたのです。兄は夢に向かって一直線に走りだしました。

救急救命士の学校に進学し、同じ夢をもつ仲間たちと勉強に励む毎日が始まりました。効率よく勉強するために学校の近くにアパートを借り、生活費をアルバイトでまかない、仲間と三人で共同生活を送りながら懸命に学びました。

たくさん、たくさん努力して、努力し続けた兄は見事に夢を実現させました。

現在兄は救急救命士として日々困っている人々を助けています。

「憧れた景色に立つことができ、とてもやりがいを感じる」といつも言っています。

誰しもが努力し続けて、思い通りの人生を歩むというのは難しいかもしれない。心が折れてしまうことだってあってもいい。回り道をしてもいい。でも、自分自身のことは絶対に諦めてはいけな。少しでも前を向いていればきっと、いつか希望の光は見えてくる。

私にはまだ、「就きたい職業」といった具体的な夢はありません。ただ兄のように努力することを諦めない人で在りたいと願うだけ。大丈夫。自分の憧れは自分で見つける。

そして夢に向かって一直線に走っていく。

だって私は兄の妹だから。

いつか兄に言わせたい。

「こいつが俺の自慢の妹だ」

世界の架け橋へ



鶴城中学校

3年

中 易 小 春

私は耳が聞こえる。そんなのあたりまえだと思う人が多いだろう。しかし、私の両親は違う。両親は生まれつき耳が不自由で、世間からは聾者と呼ばれる。聾者の両親から生まれた、耳が聞こえる私と姉は、コーダと呼ばれる。私の家は音のない世界と、音のある世界が混じり合う、一般的には珍しい家庭だ。

今ではそれが自分の普通の暮らしだが、保育園の年中までは両親の耳が不自由だということに気づいていなかった。両親とのコミュニケーションは身振りや表情で判断するものだと思っていた。しかし、保育園で母の迎えを待っているとき、友達が家族と手の動きを使わず、声のみで会話をしているのを見て、自分の家と他の家に違いがあることを確信した。幼いながらに日々抱えていた違和感と不便さの正体に気づいたものの、みんなと違うことが嫌だった私は、手話を覚えたくないと思った。

本当は、両親に対してこんな気持ちをもってはいけないという葛藤があった。けれど、家族と簡単にやりとりできるみんながうらやましかったのだ。だから私は「手話を絶対に覚え不了」という抵抗をすることでみんなと同じでしようとした。それから、両親と話すときは口の動きを読み取ってもらったり、筆談をしたりすることで会話を成立させてきた。

そんなふうに迫りやった手話への気持ちが変わるできごとが起こった。小学5年生の時のことだ。耳の不自由な人をテーマにしたドラマが流行し、友達から手話を教えてほしいと言われることが増えた。簡単な手話なら覚えていたので、わかる範囲で教えた。しかし、知らない手話を聞かれることもあった。手話を使うことでみんなとの違いをまのあたりにするのが嫌だったけれど、この時は周りの期待に応えられない自分がいるほうがもっと嫌だった。悔しかった。私は手話の勉強を始めた。

中学生になった頃には覚えた手話がかなり増えて、両親とのやりとりもはるかにスムーズになった。とはいえ、自信はなかったのも、手話を使う場面は両親と知り合いの聾者の方との限られた関わりの中だけだった。

そんな私が手話を勉強していてよかったと心

から思えたのは、去年の夏のことだ。たまたま立ち寄った店に「耳が聴こえません」とプリントされた服を着て働く夫婦がいた。知らない聾者の方だけど話してみたいと思い、勇気を振り絞り、手話で「こんにちは」と伝えてみた。すると二人は驚いた表情で、「手話が使えなの？もしかしてあなたも耳が聴こえないの？」と聞いてきた。緊張したが、返答もできた。「すごく手話が上手だね」と褒めてくれて、本当にうれしかった。心の隅に残っていた、友達に手話を教えられなかった悔しさが吹き飛んだ。それと同時に、手話が人と人をつなぐ架け橋になることに気づいた。

私の家庭環境を知って、かわいそうと言う人もいる。そう言われると少し落ち込むが、仕方がないとも思う。両親を呼ぶときは肩を叩くか手を大きく振るかしないと気づいてもらえないし、一緒に外出するときには通訳をしなければならぬ。また、聾者は見た目だけでは耳が不自由だと気づかれにくいため、支援を受けそびれていたり、世間に理解されていなかったりもする。聾者の権利を守るために設立された世界ろう連盟は、設立から50年しか経っておらず、世界的に見ても支援が始まってから日が浅い。また、聾者の母語といえる手話は、各国独自の手話が存在するため、国際化が進む現代においても外国の聾者どうしの会話は難しい状態にある。私の両親も外国の聾者との交流はほとんどしたことがないと言っていた。世界共通の国際手話というものがあるが、世界での普及率は1%程度で、まだ発展途上だ。国際手話の完成と普及には少なくとも100年かかると言われている。しかし、コーダの私は100年も待ってられない。私は、聾者と健常者のみならず、世界中のあらゆる人々の架け橋となる国際手話の普及と完成に尽力し、100年を30年にしていきたいと考えている。コーダの私自身も、音のない世界と音のある世界をつなげる架け橋で在り続けたい。そして、あなたにも架け橋になってほしい。聾者が身近にいることを知り、何ができるか一緒に考えてほしい。誰もが架け橋となれば、世界はさらにもっと広く、よりよくなっていくはずだ。



「希織には電子書籍じゃなくて紙の本を読んでほしいな」

家でタブレットを使って宿題をしていると、母はそうつぶやいた。電子書籍のほうが家になく本が読めたり、字を大きくできたりして便利なのに。母が言うように、紙の本が本当によいなら、なぜタブレットは導入されたのだろうと思った。

小学生のころ、タブレットが初めて学校にやってきた日、私は初めて使うデジタル端末にわくわくしていた。この時代の子供でよかったと思った。タブレットが導入されてから、私の学習は大きく変わった。宿題はデジタルドリルになり、採点は正確で、間違えた問題はすぐにやり直せる。わからないことがあれば検索すればよく、疑問をそのままにすることも減った。効率よく学べるようになったのは確かだ。タブレットを一つ持ち歩くだけで、教科書も問題集もついてくるのだ。

たくさんの便利さにあふれた環境で過ごすうちに、私はその便利さに何も感じなくなっていた。当たり前のように頼って、当たり前のように身近にタブレットは置かれている。

ある日、家で本棚をのぞいていたとき、一冊の本を見つけた。何度も何度も読み込んでぼろぼろになった親近感のある本だった。手に取ってみると、母の言葉が頭に浮かんだ。あのとき、さらっと聞き流していた「紙の本を読んでほしい」という言葉。私がその本と向き合ってきた過去を、ぼろぼろの姿という形で表している、親近感のある本。開けばすぐに物語に入り込むことができた。ページをめくる音が、読んでいる実感を与えてくれた。好きな場面が書いてあった位置は記憶に残っている。

少し前、私は慣れない場所で、初対面の人とたくさん関わる機会があった。そんな中で一日を過ごした終わりごろ、空き時間に、家から持ってきたぼろぼろの小説を開いた。私は、その

親近感のおかげで、すぐに物語の世界に入り込んでいった。しかしそのとき、小説を読みだした私に対して、たくさんの大人たちが驚いた顔をして見ていることに気がついた。変わったことはしていない。ただ本を読んでいるだけなのに。大人にとっては、今の若者は暇さえあればスマートフォンを開く、そんなイメージがついているのかもしれない。私たちだけではなく、大人もデジタルが当たり前の生活になってきているのだ。そのことに私は、衝撃を受けた。

当たり前に使われるようになったデジタル。私はどのようにデジタルと向き合っていけばよいのだろう。なんでも機械がやってくれるという考えや、たくさんデジタルに頼るという考え方が当たり前になってしまったら、私はデジタルがなければ何もできなくなってしまう。実際、入力変換に頼ることで漢字を思い出せないことが前より増えた。

このような現状にあるデジタルと紙。学校へのデジタル導入が進んだのは、私たちがもっとこの二つの道具を上手に使い分ける練習のためだと思う。例えば、覚えることは紙で、伝えることはデジタルでというように、それぞれの向いているところに目を向けてはどうだろうか。漢字は実際に紙に書くことで覚えられ、教科書を読むときも文字の色や書体、なんども自分の目と手を使って読み込んだ感覚が、記憶を呼び起こす手助けをしてくれる。逆に、文章や図をかくて伝えるときは削除やコピー、ペーストができるデジタルが活躍する。紙とデジタルのどちらかを選ばなければいけないのではなく、それぞれのよさで補い合って使っていけばよいと思う。紙やデジタルがどれだけ優れていても、あくまで道具でしかない。それらを使い分け、覚えたり、伝えたりして勉強するのは私たち人間だ。その特性を考えて、デジタルとの付き合い方を考えていきたい。



「輪っばが大事だ」

これは、95歳になる僕の曾祖父がよく口にする言葉だ。

曾祖父の言う「輪っば」とは、人とのつながりを大切にすることだ。僕はこの言葉を聞いたたびに、ただ昔の人の考えと思うのではなく、今を生きる僕たちにこそ必要な言葉なのではないかと感じる。人と人との関わりが減り、困ったときに一人で抱え込んでしまう人も多い現代だからこそ、支え合いを大切にする「輪っば」の考え方を受け継いでいくべきだと思うからだ。

ある日、曾祖父は昔の暮らしについて話してくれた。

「昔は物々交換が当たり前で、近所同士が助け合いながら暮らしていた。しかし、今は近所付き合いが少なくなり、近くに住んでいても顔や名前を知らない人が増えた」

思えば僕も、普段の生活で近所の人と関わることはほとんどない。昔のように、困ったときに自然と助け合える関係は少なくなっているように感じる。現代は技術が進歩し、人に頼らなくても、機械やAIに頼れば解決してしまうことも多い。便利な生活の陰で、心のつながりが薄れてきている現実を実感した。

曾祖父の家には、先祖代々の遺影が並んで飾られている。その中に、一人だけ若い軍服姿の遺影があった。

「この人は誰」

と尋ねると、曾祖父がゆっくりと話し始めた。軍服姿の人は曾祖父の兄で、戦争に行き、21歳という若さで、フィリピンで命を落としたという。曾祖父は年齢の関係で戦争へ行かなかった。

「戦争に行かずに済んでよかったね」

そう言うと、曾祖父は少し間を置き、こう話した。

「そんなふうには思わなかったよ。戦争は国のために喜んで行くものだと思っていたからね。兄が出征する日、誇らしげに歩くその背中を今でもはっきり覚えている。そのときに生きて帰ることはないかもしれないと、どこかで覚悟していた」

曾祖父の表情からは、長く抱え続けてきた悲しみが伝わってきた。その姿を見て、僕は平和な毎日のありがたさをもっと深く考えなければならなかった。今こうして家族と過ごし、友達と笑い、安心して学校に通える毎日は当たり前ではない。曾祖父が戦争で家族を失いながらも、厳しい時代を生き抜いてくれたからこそ、今の僕たちの平和な暮らしがあるのだ。

しかし、今も世界のどこかでは戦争によって苦しんでいる人たちがいる現実がある。国と国との衝突や民族間での紛争が止まないのは、思いのすれ違いや誤解を積み重ねてしまうことが原因の一つだと思う。誤解を解消するためには、双方がしっかりと関わり合い、互いを理解し合うことが必要になる。曾祖父の言う「輪っば」を築くことが重要なのだと思う。

僕は曾祖父の大切にしていた「輪っば」を世界にも広げていきたい。そのために、将来は、国際的な活動に関わり、世界の人と人をつなぐ役割を担いたいと思う。文化や価値観が異なる人々が理解し合うことこそ、平和な社会をつくる第一歩だと考えるからだ。

一人一人が互いを尊重し、思いを受け取り合うことで、国境を越えた大きな輪が広がっていく。そんな世界をつくるために、僕はまず身近な人との関わりを大切に、小さな輪を広げていきたい。日々の小さなつながりの積み重ねが人と人との「輪っば」を広げ、平和につながっていくのだと思う。

人は一人では生きていけない。昔の助け合いの暮らしも、家族の中で語り継がれる思い出も、平和を願う気持ちもすべて人と人とのつながりの中にある。曾祖父の言う「輪っば」とは、ただ仲良くすることではなく、人を思い、支え合い、思いを受け継いでいくことだと思う。だから僕は、「輪っばが大事だ」という曾祖父の言葉を、日々の生活の中で大切にしながら、自分自身の生き方として受け継いでいきたい。そして、曾祖父から聞いたこと、感じたこと、この平和の重みを、次の世代へ語り継いでいきたい。それが、今を生きる僕にできる大切な役目だと思う。

先輩らしく、自分らしく

 佐久島しおさい学校 3年 松下七緒

みなさんは「先輩」という言葉にどのようなイメージをもっていますか。私は、かっこいい、たのしい、尊敬するといったイメージをもっています。私には、尊敬する先輩がいます。それは、昨年度卒業した、現在高校1年生の三人です。その三人とは、小学校5年生のときから4年間一緒に過ごしました。義務教育学校のため、全校の行事は小学校1年生から中学校3年生までの9学年が一緒に動きます。先輩方は、いつもみんなの前に立ち、ひっぱり、みんなをまとめていました。私が行事の練習の進め方で困っていると「こうすればいいよ」と声をかけてくれて、そっと寄り添い、助けてくれました。そんな先輩に、私はずっと憧れ、そんな先輩のようになりたい、そうずっと思っていました。

そんな先輩の背中をずっと追いかけていた私の考えが少し変わった出来事が起こりました。それは、中学2年生の2学期、歴史ある「佐久島太鼓」を全校で練習するふるさと学習の授業のときです。太鼓の練習が始まる前に、先生から、

「中3の子たちが卒業した後も、太鼓を自分たちでできるようにしてほしい」

と言われました。先輩方は、太鼓も小締めも笛もできます。私は、笛は得意ですが、小締めはほとんどできません。でも、その言葉を聞いて、それではだめだと気づかされました。もっと自分でも頑張らなくてはと思った反面、まだ先輩は卒業しないから大丈夫と、先輩に甘え、頼ってしまった自分もいました。

そんな中、時は過ぎていき、先輩方が卒業していつてしまう時期が近づき、卒業式の練習が始まりました。卒業式の練習では、先輩方がいない小学校1年から中学校2年での練習も多くありました。ついに私たちが先輩の背中を追いかけていく側ではなくなり、私たちが下級生に追いかけてもらう側へと変わりました。頑張らなくてはと思っている反面、不安もありました。先輩のようにしっかりと手本になれるか、みんなをまとめられるかなど、いろいろ考えました。でももう、来年度は中学3年生。不安が

ある中、後輩に声をかけなくてはと思い、意気込んでいきました。

でも、できませんでした。自分から声を出して引っ張ることができませんでした。時間になっても「座るよ」の一言も言えなかったのです。動きや姿勢ではみんなの手本になれたかもしれないけれど、声を出す自信がなかったのです。

こんなふうは何もできないまま、中学3年生になりました。ついに、追いかけていた背中が完全に目の前から消え、私たちがみんなをまとめていく場面が多くなってきました。入学式の典礼、副会長としての立場、生徒総会など役割が増え、もっと先輩のようにならなくてはと焦りました。島民ふれあい大運動会では団長を任されましたが、自分にはできないのではと不安が募りました。先輩のようにできない。でも、やらないわけにはいかない。もっと、頑張らないと思ったとき、気づきました。そんなに「先輩のように」と執着しなくていいのではと。私は、自分から声を出してみんなをまとめたりすることがあまり得意ではありません。それなら、私ができる先輩らしさを最大限に活かしていけばいいと思いました。私は、話を聞いて一緒に考えることは得意です。だから、困っている人に寄り添えます。団長として、団員に話を聞いたり、みんなのやりたいことを聞いてまとめたりすることに力を入れました。団長の務めが終わったときに、後輩の1年生が、

「団長が一生懸命やっていてすごいと思った」と言ってくれてほっとしました。頑張ってきてよかったと、自信ができました。

これからも、たくさん、みんなをまとめる機会があると思います。私は「先輩らしく」と思っていました。でも、「先輩のようにならなくてはいけません」とではなく、「自分はこれが得意で、できるんだ」という自分の個性を大切にしていきたいです。できないからといってやらないわけではなく、できるようにと日々努力していきながら、自分らしさを消さずに、いつか、かっこいい、頼ってもらえる、そんな先輩になりたいです。

《主催》

西尾市・西尾市教育委員会

《後援》

西尾保護区保護司会

西尾人権擁護委員協議会

西尾市PTA連絡協議会

西尾地区中高生徒指導連絡協議会

西尾市少年愛護センター

西尾市民生委員児童委員協議会

西尾市子ども会育成連絡協議会

西尾市更生保護女性会